
新響
アマチュアオーケストラ
新交響楽団第133回演奏会
The New Symphony Orchestra The 133rd Concert
ヴェルディ VERDI : "La Forza del Destino" Overture
運命の力
序曲
リヒャルト・シュトラウス STRAUSS : "Der Rosenkavalier" Suite
ばらの騎士
組曲
ベートーヴェン BEETHOVEN : Symphony No.7 a-major
交響曲第7番
指揮 原田幸一郎
HARADA Koichiro, Conductor
1991年11月4日(月・祝)川口リリア・メインホール 2時開演
November 4.1991 2:00p.m. Kawaguchi Lilia Main Hall (JR Keihintohoku-line KAWAGUCHI Sta west exit)

アマチュアオーケストラ
新交響楽団第133回演奏会

ジュゼッペ・ヴェルディ：歌劇「運命の力」序曲
Giuseppe Verdi：“La Forza del Destino” Overture

リヒャルト・シュトラウス：歌劇「ばらの騎士」組曲 作品59
Richard Strauss：“Der Rosenkavalier” Suite

――――休　憩――――

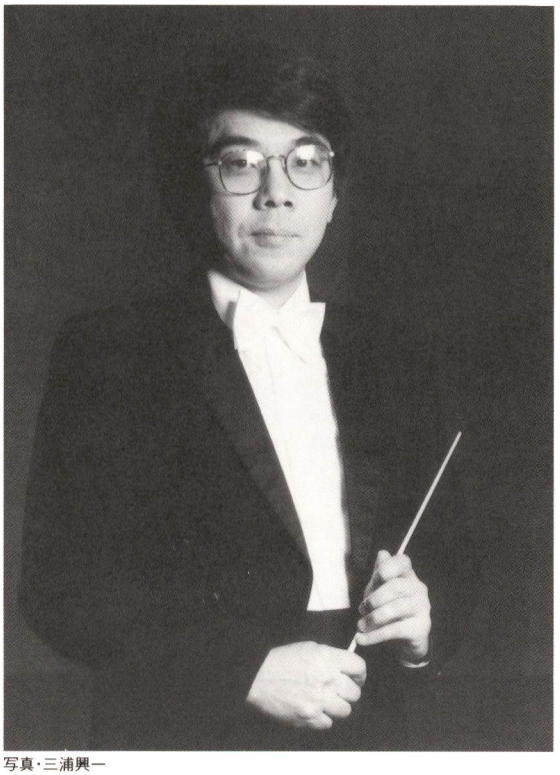
ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン：交響曲第7番 イ長調 作品92
Ludwig van Beethoven：Symphonie Nr. 7 A-dur

第1楽章：Poco sostenuto – Vivace
第2楽章：Allegretto
第3楽章：Presto
第4楽章：Allegro con brio

1991年11月4日(月・祝)2:00 p.m.
川口リリア・メインホール
主催：新交響楽団

指揮

原田 幸一郎



写真・三浦興一

1945年生まれ。桐朋学園とジュリアード音楽院で齋藤秀雄、秋山和慶、ドロシー・ディレイ、イヴァン・ガラミアン氏らにヴァイオリンと室内楽および指揮法を学ぶ。

69年から12年間、東京クヮルテットの第1ヴァイオリンを務め、世界の桧舞台で常に高い評価を受けてきた。81年に東京クヮルテットを離れ、クリーヴランド音楽院のヴァイオリン科主任教授とイェール大学、アスペン音楽祭でも教鞭をとりつつ、室内楽奏者として、ニューヨークのリンカーン・センターやワシントンDC等のコンサートで広く活躍。

83年から日本に居を移し、ソリストおよび室内楽奏者として内外で活躍。さらに86年には数住岸子と"NADA"（ナーダ）室内楽シリーズをスタート、従来にない高度なアンサンブルを誇っている。

88年4月、九州交響楽団の〈モーツァルト定期〉で指揮デビューを飾り、翌月の新日本フィル〈ハイドン定期〉の東京デビューも好評を博した。さらに桐朋学園のオーケストラをたびたび指揮するほか、90年も〈ハイドン定期〉への再登場、〈倉敷音楽祭祝祭合奏団〉等を指揮。

現在、桐朋学園で教鞭をとる。国際的に高く評価されている名手で、日本の音楽界、特に室内楽の分野での今後の貢献に大きな期待が寄せられている。

ジュゼッペ・ヴェルディ

歌劇「運命の力」
序曲

作曲年代：1861年～1862年
楽器編成：フルート2（ピッコロ持ち替え）、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、テューバ1、ティンパニ、大太鼓、シンバル、ハープ2、弦5部
初　　演：1862年 ペテルブルグ

歌劇「運命の力」は、ペテルブルグ帝室歌劇場の依頼により作曲され、1862年初演された。ヴェルディ49歳、22作目の歌劇であり、ロシアで初演されたのはこの作品のみである。初版には、この序曲（シンフォニア）は存在しない。後に改訂が加えられ、最後に絶望したアルヴァーロが投身自殺するところを、瀕死のレオノーラをグァルディアーノ神父と共に看とるとし、本序曲も加えられた。改訂作は1869年にイタリア初演が行われ、大成功を収めている。

ヴェルディは歌劇を26曲作曲しているが、序曲付きは数少ない。「シチリア島の夕べの祈り」と、この「運命の力」と、歌劇自体は超有名であったにもかかわらず序曲だけはかなり最近になって発見された「アイーダ」（2年前の東京ドーム公演で日本ではますますポピュラーになった）の3つほどである。この3序曲はどれも内容の充実した作品となっている。

そもそもロシアから新作の依頼があった時、ヴェルディは長らく暖めてきたヴィクトル・ユーゴーの「リュイ・ブラス」をオペラ化してロシアで初演しようと考えていたらしい。だがロシアのみならずイタリア内でもそうであったのだが、検閲が厳しく、危険な主題は取り上げてはならぬと勧告があり、その結果リヴァス侯ドン・アンヘロ・デ・サアヴェドラの「ドン・アルヴァーロ――運命の力」に決定したのであった。

ストーリー概略

18世紀半ばのスペイン。侯爵の娘レオノーラはアルヴァーロについてくるように言われるが、父を思って駆け落ちをためらう。その時、侯爵に見つかってしまい、剣を持ってきた侯爵にアルヴァーロは争う気はないと言って持っていたピストルを投げ捨てるが、それが暴発して侯爵に当たり、息絶えてしまう。2人は逃げ去るが途中ではぐれてしまい、捨てられたと思い込んだレオノーラは修道院に入ってしまう。

一方逃げのびて軍人となったアルヴァーロはそれとは知らずレオノーラの兄のカルロを助け、2人は友人となる。その後戦闘で傷ついたアルヴァーロはカルロに自分のトランクを渡すが、トランクの中のレオノーラの肖像を見たカルロは全てを知り、復讐を誓う。傷の癒えたアルヴァーロとカルロは決闘になるが、兵士達に止められカルロは連行される。

アルヴァーロはラファエレ神父と名を変えるが5年後にカルロに見つかり、しかたなく剣をとり、結局カルロを刺してしまう。臨終の彼に祝福を、と修道院の洞穴の扉を叩くとレオノーラが現れ、2人は驚きの叫びをあげる。カルロは走り寄ってきたレオノーラを最後の力をふりしぼって刺す。駆けつけたアルヴァーロと神父とに天上で待ちます、と言い残し、レオノーラは息をひきとる。

序曲は、冒頭の金管の3つの音（第2幕冒頭のもの）に続き弦による不安げな運命のテーマが始まる。アンダンテ e-moll のアルヴァーロとカルロの2重唱のテーマ、G-dur のレオノーラの祈り、E-dur のレオノーラと神父の2重唱、終盤の盛りあがりなど、短いながらも多くの魅力を含む曲である。

（Vn.　山口佳子）

リヒャルト・シュトラウス

歌劇「ばらの騎士」組曲

作曲年代：1909年～1910年（組曲は1945年）
楽器編成：フルート3（ピッコロ持ち替え）、オーボエ3（イングリッシュホルン持ち替え）、クラリネット2、Esクラリネット、バスクラリネット、ファゴット3（コントラファゴット持ち替え）、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、テューバ、ティンパニ、大太鼓、小太鼓、シンバル、トライアングル、タンブリン、ラチェット、グロッケンシュピール、チェレスタ、ハープ2、弦5部
初　　演：1911年 ドレスデン（オペラ）

R. シュトラウスのオペラ全15曲の殆んどは、40歳台にさしかかる頃、すなわち歌曲と交響詩の作曲により、声楽と大規模管弦楽の用法を極めた後に作られた。数の上でも交響詩の9曲より多く、彼の本領はオペラにある、と言って良い。

「ばらの騎士」はその5曲目に当り、「モーツァルト・オペラを作りたい」という作曲家のアイディアに、フーゴー・フォン・ホーフマンスタール（1874～1929）が応えて台本を書き下ろしたもので、「音楽のための喜劇」と附され、「フィガロの結婚」に代表される18世紀オペラブッファへの憧憬が込められている。18世紀マリア・テレジア治世下のウィーンを舞台に、楽しい中にも人間の本質を突くドラマを、豊かな旋律と軽快な明るさに近代的技法の薬味をきかせて仕立て上げ、生き続けるモーツァルト精神を謳い上げている。

ともに女性による少年役、オクタヴィアンとケルビーノを始め、フィガロとの共通点も多く、またオペラブッファの常套手段「変装、入れ替え、計略」なども程良く配されている。併せて単なるドタバタ劇や懐古趣味に陥ることなく、音楽、文学両面において、それまで培われた高度な技術を駆使した、程度の高い芸術作品であるとの自負を感じさせる。

今日演奏する組曲は、1945年にオペラの中から音楽的に優れた部分を繋ぎ合わせて作られたため、特に筋は追っていないので、次にあらすじと組曲にとり上げられた部分、及び順序を数字で記す。

あらすじ

何やら意味ありげな①前奏に続き幕があくと、そこは侯爵夫人の寝室、夫の留守に、若いオクタヴィアン伯爵との“翌朝”です。邸内の物音にオクタヴィアンはあわてて身を隠します。無遠慮に入ってきたオックス男爵は、貴族に列せられたばかりの豪商ファニーナルの娘ゾフィーと近く結婚するので、花嫁の家へ結納の印・銀のバラを届ける“ばらの騎士”の人選を頼みに来たのでした。傲慢で好色な男爵は、若い娘と莫大な財産が手に入るとあって有頂天。日頃のご発展ぶりを自慢する厚顔さに加え、その場を逃れるために、小間使いに変装したオクタヴィアンにも手を出そうとします。夫人は悪戯心から、オクタヴィアンをばらの騎士に推薦します。請願人や傭人らが登場し、ひとしきりの喧噪の後、１人になった夫人は、自分の色香の衰えに思い至り、寂寞の念に沈むのでした。

第２幕は花嫁の家、⑦婚約の日です。家中の興奮が高まった所へ、②ばらの騎士が到着します。銀色に煌めき、香りすら施した人工のばらを捧げるオクタヴィアン、受け取るゾフィー、目が合った２人は、たちまち一目惚れ、言葉を交すうちに思いは高まります。そこへ父親と共に登場した男爵は成上り貴族で腰の低い元商人の前で増長するばかり、ゾフィーに対し、性的いやがらせに及ぶ始末です。ゾフィーの幻滅もオクタヴィアンの怒りも全く意に介さず④上機嫌で小唄を口ずさむのでした。手続きのために男爵は退出、残った２人の気持は一気に燃え上り、口づけを交した所を③２人組情報屋にとり押えられます。呼出された男爵のあくまで傲慢な態度に、遂に剣を抜いたオクタヴィアン、しかし空いばりの男爵は、たちまち傷を負ってしまい大混乱になります。オクタヴィアンは丁重に追い出され、上等ワインで気をとり直し始めた男爵のもとへ例の女情報屋が手紙を届けます。差出人のマリアンデルなる女性とは侯爵夫人の小間使い、実はオクタヴィアンなのです。⑤女に読ませてみると思いがけず恋文――ここでは19世紀後半に主にウィーンの酒場などでもてはやされたシュランメル音楽風のヴァイオリン・ソロ（当団の自慢です。お聞き逃しなきよう）が次の場面を暗示します――計略とは知らず、ワインの酔いも手伝って、⑥すっかり上機嫌でワルツを口ずさむオックス男爵でした。

第３幕はいかがわしげな宿屋の個室、男爵をたぶらかす算段が整ったところへ２人の登場です。ワインの力も借りてマリアンデルを口説き落とそうと躍起になる男爵は、逆にさんざん翻弄され、やがて怪しい人影が出没したり、喪服姿の子連れ女がまとわりついたり大混乱。逆上した男爵が警官を呼んだためかえって騒ぎは広がり、男爵の立場は不利になる一方です。呼び出されたファニーナルは激怒し、ゾフィーは破談を喜ぶ所へ侯爵夫人まで登場します。若い２人の仲をすぐさま見抜いた夫人は、男爵に潔く諦めるよう、決然と言い渡し、自らも身を引くことを決意します。勘定書を持った男たち、先程の子連れ女らがとり囲んで⑩大騒ぎする中から、男爵がほうほうの態で逃げ出した後、その場は３人だけになります。２人の女性の間でゆれ動くオクタヴィアン、三者三様の思いの⑧３重唱、彼を促し、あくまで誇り高く去って行く夫人、若い２人は⑨愛の２重唱を歌い上げ、手をとり合って退出します。オペラブッファの様式に則って要所を固めた重唱のうち、最も美しい２曲がハッピーエンドを盛り上げた後、誰もいなくなった舞台に小さな人影が、黒人の小姓がゾフィーのハンカチを捜しあて、喜んで走り去ります――何とも洒落た幕切れではありませんか。

このオペラが1911年にドレスデンで初演されるや、たちまち大評判となり、観劇特別列車まで仕立てられるほどだった。とりわけ組曲でもメインとなる「オックスご機嫌のワルツ」は、大層もてはやされ、ウィーンでは楽員は口ずさみつつ奏き、客席は波打ったと伝えられる。ヨゼフ・シュトラウスの「ディナ

ミーデン」をモデルにしたウィンナワルツは、マリア・テレジア時代には存在しないと、あら捜し批評家はヤリ玉に上げたが、古き良きウィーン情緒を表わすのはワルツしかないっ！と言えるほど、この作品を見事に盛り立てている。

しかし初演当時、この作品がことさら人々の郷愁を誘い、人気を博した裏には、暗い世相――良き時代の終焉への不安があった。オーストリアのセルビア宣戦に端を発した第一次大戦は、それから３年後に始まった。　　（Perc. 上原　誠）

ルートヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン

交響曲第７番

作曲年代：1811年～1812年
楽器編成：フルート２、オーボエ２、クラリネット２、ファゴット２、ホルン２、トランペット２、ティンパニ、弦５部
初　　演：1813年 ウィーン

本日の最後を飾るのは、ベートーヴェンの第７交響曲です。この曲はオーケストラの演奏に携っているような人ならば必ず知っていなければならない曲の１つです。試しに私の音楽仲間に今度７番を演るのだといってみましょう。すると、必ず「何だ」という顔をされてしまいます。口の悪いのになると「新響は最近名曲プロばっかりじゃない」といわれてしまう。いつも、新響はわけのわからない曲ばっかりだから行くのいやだ、と言っていた人がです。

要するに、この曲は奏くにしろ聴くにしろもう充分な曲ということなのでしょう。たしかにこの曲は名曲には違いない。日本に限ってみても、今までどれくらい、コンサートで、リハーサルで、あるいは家のステレオで音になったかわからない。もう、この曲は沢山という声があちこちから聴こえてきそうです。実をいえば、かくいう私も何となくそんなふうに思っていました。ところが、今度この曲を演るというので、改めてこの曲を奏いてみて、この曲がどんなに素晴しく面白いものを含んでいるかということを思い知ったのです。この曲は、誰が何といおうと西洋音楽作品の傑作中の傑作なのです。と、いくらリキんでも仕方がありません。この曲がどうして面白いのか、あるいはこの曲をどんなふうにして聴くとより楽しめるかということについて、私なりに書いてみましょう。念のため断っておきますが、私は評論家でも音楽学者でもありませんので、いい加減なことを書くかもしれません。その辺は御容赦下さい。

さて、この曲は堂々たる序奏部をもっています。ベートーヴェンやモーツァルトに限らず、交響曲には序奏部のついているものが数多くあります。昔の人は、演奏が始まったくらいではなかなか静かにならなかったようですから、音楽に興味がなくてとても集中できそうもない人のためには睡眠薬のかわりとして、あるいは日常の生活に煩わされていて音楽の世界に急には入っていけない人には、その調子を整えてくれるものとして、取り入れられたのかもしれません。

ベートーヴェンの交響曲のうちでどの曲に序奏部がついているか知っていますか？　これを知っている人はかなりの通。もうこの後を読む必要はありません。ところで、その答えはというと、第１、第２、第４、第７の４曲です。ベートーヴェンの交響曲は９曲ですから、約半数の曲に序奏部がついていることになります。中でも、第７交響曲にはかなり大規模な序奏部がついています。これだけで１つの楽章ができてしまいそうな音楽です。その部分が終わると主部に入ります。テンポが３倍くらい速くなるところです。さて、この部分のフルートのリズムに注意して下さい、そこには（タッタタタッタタ）というリズムがあります。そんなに難しいリズムではありません。このくらいなら曲を知らなくても覚えられそうですね。しかし、このリズムを軽く見てはいけない。実は、この楽章はすべてこのリズムからできているのです。むしろこのリズムが出てこない方が珍しいくらい。

このリズムが活動をやめたら、次にベートーヴェンがどのようにして、再びこのリズムを忍びこませ、発展させていっているかに注目してみましょう。彼はそれをできるだけ自然に、気づかれなくするため、いろんなワザを使っています。このリズムを常に感じながら聴くだけでも、この曲の面白さは百倍しますから、だまされたと思って一度試してみて下さい。こういった曲作りの巧妙さに目を向けず、旋律ばかりに目を向けると、彼の音楽の面白さはかなり色あせたものになってしまいます。次の第2楽章は落ちついた感じの曲だから、リズム的なものは強調されていないだろうと思うと大間違い。今度は♩♫♩♩（タンタタタンタン）というこれ以上は考えられないような簡単なリズムでこの楽章を押し切っています。それに続く3、4楽章はどうなっているでしょう。それはひとつ皆さんで考えてみて下さい。　　（Vc.　長島良夫）



写真・桜井哲雄（Ob.）

新交響楽団名誉指揮者
山田一雄氏の逝去によせて

その知らせは本当に突然やってきました。7月21日に先生と第132回演奏会を終えたばかりであり、しかもその演奏会が先生の最後の演奏会となってしまったのです。8月13日の朝のニュースでこの急報を知った団員一同、失ったもののあまりの大きさにただ呆然でした。

山田先生と新響の最初の出会いは1979年の秋、第86回演奏会のマーラーの交響曲5番の練習でしたが、以来、先生は変わることのない情熱で、練習でも決して「アマチュアだからこのへんで…」などという手加減をせずに、最高の音楽を目指す1人の音楽家として、毎年欠かさず私たちに接してくださいました。約12年間にわたって新響が先生から贈られた音楽的な財産の大きさははかり知れず、その財産がその後の新響の進むべき方向を決定づけたといっても過言ではありません。9年間かかって11のすべての交響曲を手がけた「マーラー・シリーズ」は私たちにとって大きな自信となり、この貴重な経験は団員一人一人のかけがえのないものとなっています。

先生が日本の音楽界に印した足跡の大きさはあえて言うまでもありませんが、新響にとっても、本当に大切な人でした。

つつしんで先生のご冥福をお祈り申し上げます。

1991年11月4日
新交響楽団理事長
土田 恭四郎

アマチュアオーケストラ

新響が団員を募集しています

新交響楽団は創立約30年、いろいろな人たちによって自主運営されているアマチュアオーケストラです。ヒラから社長までにわたるサラリーマン、学校の先生、学生、独身貴族もいれば主婦もお父さんもいます。
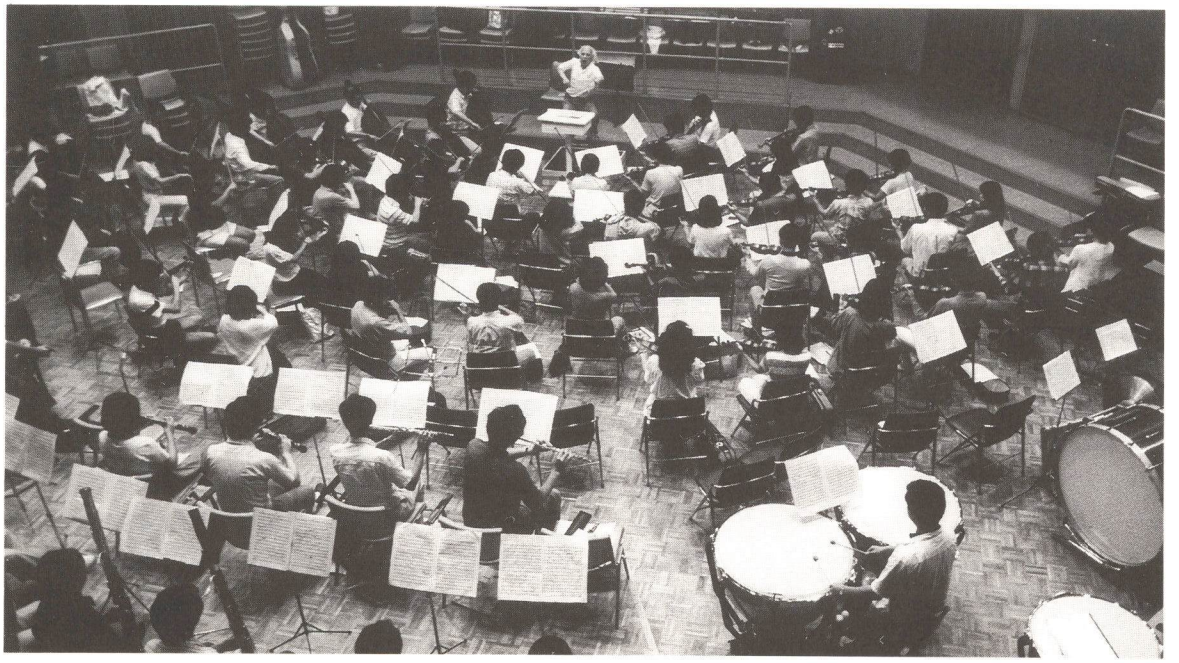
新響の宣伝をさせてください。まず、「アマチュアのオーケストラ」を前面に出していること。プロの亜流みたいな演奏はしたくないのです。プロは生活がかかっていますが、私たちは音楽を楽しむためにお金を払います。だからこそ、払う価値のある活動をしたいと思っています。具体的に言えば、あまり知られていない優れた曲を紹介したり、プロよりはるかに多く愚直ともいえる練習を重ねることによって曲に深く接近することなど、いろいろな試みを企画することです。

新響が最近行った主な演奏会には次のようなものがあります。

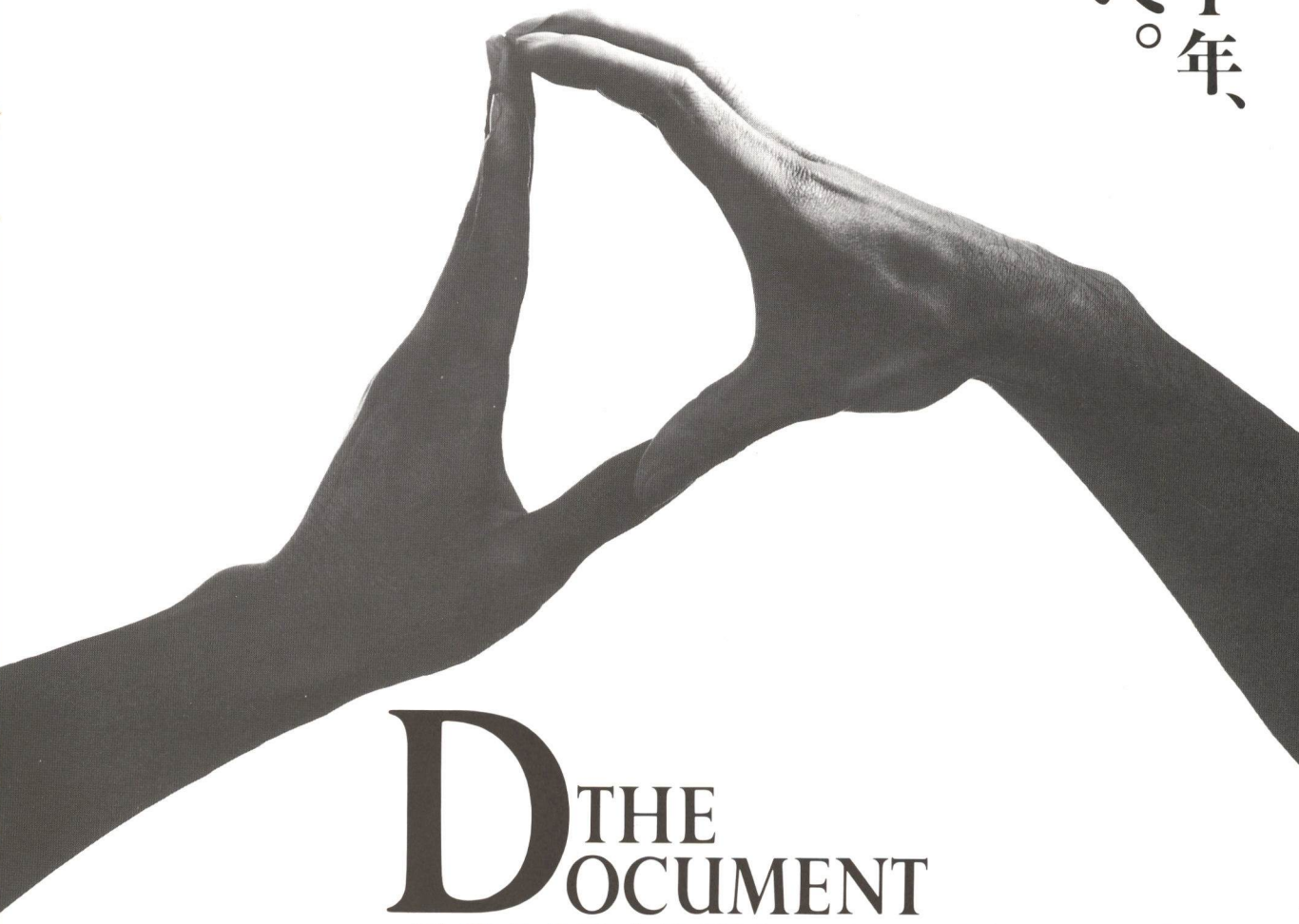
・日本の交響作品展（邦人による隠れた名曲を発掘。約10年がかりで多くの作曲家の作品を演奏。指揮＝芥川也寸志。このシリーズはサントリー音楽賞を受賞しました）
・中国作品展（作曲家・独奏者を中国より招聘）
・マーラー・チクルス（交響曲全曲を演奏。指揮＝山田一雄）
・ショスタコーヴィチ交響曲第４番日本初演（指揮＝芥川也寸志）
・ヒロシマ・レクイエム（細川俊夫氏に新曲を委嘱、初演。指揮＝今村能）

今後も積極的にアマチュアオーケストラとしての可能性を探っていきたいと考えています。そのためにあなたの力が必要です。文章が長くなりました。何よりもまず一度、練習をご覧ください。いつでも歓迎です。

練習――――毎週土曜６～９時、東京文化会館中リハーサル室他。なお練習時の託児制度があります。
募集パート――弦楽器（特にチェロ）、木管・金管・打楽器。
お問合わせ先――市川☎0425(62)4595



1991年、XはDへ。



THE DOCUMENT COMPANY

人は、ドキュメントで考え、ドキュメントで伝え、ドキュメントで感じ、ドキュメントで決める。

ここに「ドキュメント」というひとつの言葉があります。情報がカタチになったもの、です。なぜ、人は情報をドキュメントにするのか。人は、考え、人に伝え、人を動かすために情報を、紙やディスプレイに文字、数字、絵を乗せてカタチ(ドキュメント)にします。また、ドキュメントというカタチにしてはじめて人の創造力に応え、人の心にまで届く深いコミュニケーションに役に立つのです。私たちは、人々の、情報をもっと価値のあるものにし、もっと人に届くカタチにしたいという気持ちの実現に全力を注ぎます。さらに美しく、速く、自由に——私たちの技術やシステムがどこまで応えられるか。情報がドキュメントになってゆくまでのプロセスに、広く関わってゆくことが、今までも、そしてこれからも私たちの仕事です。1991年、改めて自己紹介します。富士ゼロックスは、ドキュメント・カンパニーです。

富士ゼロックス株式会社
本社 〒107 東京都港区赤坂3-3-5 電話 03(3585)3211
XEROXは登録商標です。

XEROX

New Work Way

私たちは、ドキュメント・カンパニーです。


愛する心で、応答願います。
今くちずさんでいるその歌を、大切にしたいから。
歌をくちずさむ気持ち、音楽を愛する心を大事にしてください。
JASRACは、著作権の管理を通して世界の音楽を守っていきます。
あなたは、音楽を愛する心で少し、
詞や曲をつくった人たちのことを考えてみてください。
JASRAC
日本音楽著作権協会
理事長　石本美由起
〒105 東京都港区西新橋1-7-13　☎(03)3502-6651